「今日の説教、聴き手のために」　2013/4/14　明治学院教会（309）
（このプリントは毎週作っているものです）　牧師　岩井健作

「謙遜ということ」

民数記１２章３節「モーセという人はこの地上のだれにもまさって謙遜であった」
マタイによる福音書１１章２９節「わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい」(29)

1、「謙遜」という言葉は、今まで人生で交わりを与えられた幾人もの方たちの記憶を甦えらされる。片岡慶彦さんは山口県の同じ地域の小さな教会の牧師を地味にしておられた。つつましいかたであった。ある年木版画で器用に「へりくだって貧しい人々と共におるのは高ぶる者と共にいて獲物を分けるにまさる。」（箴言16:19）と彫って年賀状で送ってくださった。1970年代、高度経済成長期、日本のアジアへの経済侵略が叫ばれていた時代であったので、この言葉はインクの香りと一緒に心に沁みた。今は亡き彼の人柄と共に言葉が暖かく生きている。

2、聖書で「謙遜」を考えるには三つの面を忘れてはならない。「謙遜」はまず第一に、「イエスの出来事」である。「わたし（イエス）は柔和で謙遜（タペイノス）な者だから」（マタ11:29）。「キリストは神の身分でありながら・・・・人間の姿で現れへりくだって（タペイノオー）死にいたるまで、それも十字架の死に至まで従順であられた」（ピリ2:6-8）。第二は、「人間が神に関わる（従う）基本的な姿勢」。「モーセは・・・だれにもまさって謙遜であった」（民12:3）「謙遜（タペイノス）なものには恵みをお与えになる」「主の前にへりくだりなさい（タペイノオー）」（ヤコブ4:6b, 10）。その他引照すれば切りがない。第三は、「人の謙遜が神の謙遜に繋がって行くにはどうしたらよいか」ということ。ここでは「謙遜」を努力するというような倫理目標に考えてはいけない、という事が明確に押さえられねばならない（パウロのいう律法主義の克服である）。人を「謙遜」に至らせるのは、そのこと事態が「神の出来事（恵み）」である。「主はその腕で力を振い、思いあがる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高くあげ」（ルカ2:51マリヤの讃歌、マグニフィカート）。「神は地の面に雨を降らせ、野に水を送ってくださる。嘆く者を安全な境遇に引上げてくださる」（ヨブ5:11）。「招き（恵み）」がまずあって「応答（主体的決断）」が呼び覚まされる時にここそ、「人間の謙遜」は、はじめて芽生え、形を成す。「謙遜」を妨害する「自分本位」「自己中心」いわば「自分の命を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従ってきなさい」（マルコ8:34）という逆説を会得しないといけない。「謙遜」は関係概念なのである。「だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」（マタイ23:12 関連箇所）。「謙遜ぶること」は裏返しの「高ぶり」であろう。

3、僕の友人の小林茂さんは、陸軍幼年学校（軍人）で敗戦を迎え、戦後税務署の官吏だったが退職浪人、その後袋物商の住み込み丁稚小僧をやった。後賀川豊彦の伝道集会でキリスト教に触れ、牧師になった。人生で一番役に立った経験は丁稚の経験だったと本『キリストの証し人』に書いている。味のある話である。